

コロナ禍における宗教的ビジョンの模索

- アメリカのメノナイト教会の事例から -

中朋美*

How Can We Respond to Changing Social Contexts During the Covid-19 Pandemic as Mennonite Believers?

A Case Study of a Mennonite Congregation in the US

NAKA Tomomi*

キーワード：キリスト教、メノナイト、モラルティー、パンデミック、アメリカ

Key Words: Christianity, Mennonites, Morality, Covid-19 Pandemic, United States

I. はじめに

2020年からは世界的に広がった新型コロナウイルス感染症は様々な場面で影響をもたらしている。感染防止のため、人が集まる場面を避けることが各地で求められてきた。この論文では、そういった影響を受けたアメリカのメノナイト教会の活動の様子を取り上げながら、彼らの新しい状況下での教会、そして信者としての歩みの模索を考察する。メノナイト教会はほかの多くのプロテスタント教会と同様に、教会に集まり、説教を聞き、讃美歌を歌い、お互いの様子を尋ね、教会関連の慈善・奉仕活動を行ってきた。しかし2020年からの新型コロナウイルス感染症の広がり、それまでの方法での教会の活動を困難とした。また同時に2020年から2021年のアメリカでは、キリスト教右派やキリスト教ナショナリズムの活動の活発化、大統領選挙、人種差別問題とブラック・ライブズ・マター運動の盛り上がりやそのほかの差別反対運動など多くの社会的な課題と対立が表面化した。こういった社会状況の中で、教会の在り方自体が特に問われた期間であった。そして、より一層コミュニティとしてお互いのつながりを保つとともに、自分たちの宗教的ビジョンの検討が必要とされた時であった。ここでは一つのメノナイト教会の事例を取り上げつつ、近年の広い意味でのモラルティーに関する人類学などの研究と関連させながら、時に対立するあるべき信徒としての姿

や宗教的な方向性への対応を考察する。

II. モラルティーをめぐる人類学的な研究

人類学では、2000年ごろから道徳や倫理に関する関心が高まり、さまざまな研究が行われてきた(Dyring et al., 2017; Laidlaw, 2002)。ここでは研究者によって、道徳、倫理、モラルティー、エシックスと表記を区別し、それによって違う意味を表現する場合(たとえば Keane, 2016; Laidlaw, 2017)がある。しかしこの論文では便宜上そういった区別をせず、モラルティーという表記を用いて、ある社会や人々の間で共有されている行動原則を指すこととする。

ここ数十年で注目を浴びているモラルティー関連の研究であるが、それに関する研究はそれ以前にも存在する。多くの社会学者や人類学者にとっては、社会の基盤をなすべき行いの規範であるモラルティーは、文化や社会の中心にあり、社会や文化の理解と何らかの点で関わるものである。道徳・倫理といった言葉が明確に用いられなくても、社会の価値観や方向性といった考察は存在し、それらは現在のモラルティー研究につながるものである。

しかしこれらは社会構造やその変化と規範との関係に焦点をあてる傾向があった。対して近年の研究の多くは、人々が、日々のあるいは非日常的な事態に対応していく際に、どのようなことが、どのようなべき姿として模索され、対応していくのかという実践に着目が集まっている(Dyring et al., 2017;

*鳥取大学地域学部国際地域文化コース

Lambek, 2017; Robbins, 2007)。これら過去20年ほどの研究では、モラリティーがすでに存在するというよりも、それが人々の行動に影響を与え、また影響を受けているのかを、詳細な民族誌的な調査で明らかにしている。

とはいえ実際の研究は多様であり、方向性をまとめるのは難しいとされる(Dyring et al., 2017; 神原2016)。たとえば、マッティングリーらが編集した本(Mattingly, 2017)では、人を道徳や倫理へ向かわせる衝動をモラル・エンジンと呼び、それに対しての人類学や哲学的な研究を3つのアプローチにまとめて紹介している。それらは、道徳や倫理と人間性との関係性についての考察(Raffoul, 2017; Wentzer, 2017)、どういった場面や行動が倫理や道徳性の表現とされるのかの考察(Throop, 2017)、そして道徳的な行動が必要とされる場面とそこでの反応といった道徳的な経験の考察(Meinert, 2017)である。この区分は重なる部分も多い。2つ目のモラリティーの表現の研究は、モラリティーの経験の場面を前提としているともいえ、区分の違いは研究の重点の違いともいえる。

この論文の中心的な考察の焦点は、最後のアプローチで、新型コロナウイルス感染症などによって変化する状況下での教会のあるべき姿の模索を考察する。ここで取り上げる事例と同じように、これまでの研究の多くは、病気、事故、災害といった日々の生活において危機感や不確実性を高める出来事に対応する人々を考察するものが多い。例をあげると、家族の病気のケア(Mattingly, 2014)、戦争や政治的な混乱(Kleinman, 2017; Meinert, 2017)などを取り上げた研究がある。モラリティーへの模索が、日常が大きく変化する際により明確な形であらわれるからかもしれない。この論文でも、新型コロナウイルス感染症の拡大を契機としたある種の危機的な、非日常的な状況を取り上げる。そしてそこで、あるべき姿の模索がいかに周囲の出来事や考え方との関係の中で語られ、提示されているのかを見ていきたい。そしてこの考察から、そういった広い関係性の中においてどのように自分たちを位置づけていくのが、あるべき姿の追求やその実践といったモラリティーの現れや経験を検討する重要なひとつのつながりとなる事例を提示できればと考える。

III. メノナイト教派とその多様性

ここで取り上げる教会は、キリスト教再洗礼派のメノナイト教派(あるいはメノー派とも呼ばれる)

に属する。メノナイトグループと同じ再洗礼派の教派にはアーミッシュやブレザレングループが含まれる(Redekop, 1989)。再洗礼派の信者や教会は、外部からみると同じ宗教的ルーツをもつとは容易に判断できないほど現在では多様な教会が存在する。しかし一般に、信徒の共同体が重視され、信徒間の相互扶助が奨励され、平和主義の立場をとっている教会が多い(たとえばNaka, 2011)。

この論文で取り上げる教会は、1950年代に創立されたメノナイト教派の中でも比較的リベラルなグループの教会で、アメリカ東部のバージニア州にある。ここでは教会名をイーストサイド教会と呼ぶ。個人情報等の保護のため、教会名及び登場する人物名はすべて仮名である。リベラルなメノナイトグループは一般的に服装やリクリエーション、メディア等に関する教会の厳格な規則がなく、高等教育に対して消極的な態度を取っていない(詳しくはNaka, 2011などを参照)。リベラルグループの中にも福音主義色が強く、ほかのキリスト教右派とされる教会に近い教会もあるが、この教会はそうではない。ほかの教派のキリスト教会、そしてキリスト教以外の宗教グループとある程度の対話と協働を重視しており、また布教活動以外の開発援助等、海外での広い支援活動に参加する教会員も多い。

教会員の数は2020年9月現在で約350人である。ほかのアメリカのプロテスタント教会と同様に中心は中高年の信徒であるが18歳以下の教会員も一定数いる。日曜礼拝では、通常の説教の時間とは別に子供のためのお話の時間があり、対面での礼拝時には、そのお話を聞きに10人ほどの子供たちが礼拝堂の前に集まる姿が見られる。またそれとは別に子供たちのための日曜学校のプログラムも複数ある。対象となる子供たちのプログラムは高校生までであり、高校卒業者は春に礼拝で紹介され、2020年、2021年ではそれぞれ15名ほどが紹介された。彼らのほとんどが大学に進学予定であった。

リベラルなメノナイトグループであるので、現在のイーストサイド教会員は、外見からでは彼らがメノナイト教会員であることは判断しにくい。しかし65歳以上の教会員の中には、現在の保守派のメノナイトの教会員と同様の服装や行動規範を守っていたと話す人も多い。この多くは、現在のように保守派とリベラルグループとの分化が進む前に青年期を過ごした人たちである。たとえば、現在の保守派の女性が頭にかぶっているカバリングを昔は自分もしていた経験話は談話の時間で何度か登場した。またこ

れよりも少数ではあるが、それ以後のメノナイトの分化が進んだ後に保守派のメノナイトあるいはそのほかの再洗礼派のグループからこの教会に移った人もいる。またリベラルなグループの教会で育った人の中でもイーストサイド教会は進歩的と感じた人もいる。たとえば、ある女性は日曜礼拝の子供たちに向けた話の中で、自分はこの教会で初めて女性の説教者をみたと話した場面があった。最近まで女性が教会で指導的な立場に立つことがなかった教会もリベラルなグループにはあり、そういった教会で育った人が、大学進学などを契機として転居し、イーストサイド教会に移った場合もある。

イーストサイド教会は建物と比較的広めの土地を所有している。パンデミック前は、地域の託児プログラムへ建物の一部を貸し出すことなどによって、副収入を得ていた。教会の有給のスタッフは、10名弱である。牧師は男性1人、女性2人の3名で、全体の統括をするシニアパスターであるデービッドに加え、成人の教会員のスピリチュアルなケアを担当するメアリー、子供・若者を主にケアするジュディーが働いている。彼らのほかに、教会の事務や会計担当者2名、加えて、清掃担当者、建物・庭等の整備担当者など、パートタイムを含め10人弱が有給で働いている。

彼らのほかにも多くの教会員が日々の教会の活動に携わっている。たとえば日曜礼拝では司会者、讃美歌のリードをするソングリーダーと礼拝堂の前で参加者とともに歌を歌うシンガーの人々、子供のためのお話の担当者、音楽担当者、音響・映像担当者など、多くの教会員が役割を担当している。この他に、日曜の聖書勉強会、いくつかの家族で定期的に親睦と聖書を学ぶ会、キルトなど作る会、リサイクルやスポーツなどをする会など、いくつか定期的に会合を持つグループがある。これらの活動はほかのメノナイト教会でもよく見かけるものである。

イーストサイド教会と教会員は、メノナイト教会や教会員であるとすぐわかるような特徴はないが、メノナイトの、そしてそのルーツである再洗礼派の伝統は重視され、そのことは様々な場面でうかがえる。特に相互扶助の大切さ、平和主義の基本姿勢は教会の活動でもしばしば述べられ、それらは教会の宗教的なミッションと関連して取り上げられることが多い。しかしそれらの具体的なとらえ方は保守派のメノナイトグループとは解釈が異なる。たとえばこの教会では、ほかのリベラルなメノナイト教会でしばしばみられるように (Naka, 2011)、自分たちの共同体以外の人々、特に社会的、経済的に弱い立場

の人々に対する支援について宗教的な立場から積極的に取り組もうとしている。また保守派グループが政治活動と距離をとり、目的が何であれ、自分たちのグループ以外の活動の参加には消極的であるのに対して、平和主義や人種差別や経済的格差解消のためならば、広く活動に関わる人も多い。

イーストサイド教会では 2019 年夏に事前調査を行い、教会スタッフ等に直接面談をすることができた。研究の当初の計画では 2020 年夏に直接訪問して継続的な調査を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症の広がりによりそれが不可能となった。このため、オンラインでの教会行事の参加にできる限り参加することで教会の様子を調査した。調査期間は 2020 年 3 月から 2021 年 8 月中頃までの期間の約 17 か月である。

IV. イーストサイド教会

1 パンデミックでの状況

2020 年の出来事として最も大きなインパクトを与えたものは新型コロナウイルス感染症の世界的な広がりである。2020 年 3 月 11 日に世界保健機関によるパンデミック宣言が出され、アメリカでは 3 月 13 日にトランプ大統領によって国家緊急事態宣言がなされた。これを受け各州の権限によって外出制限などが出される事態となった。イーストサイド教会は 3 月 15 日の日曜日の礼拝を中止した。同様の対応はリベラル、保守派のメノナイト教会の多くでも取られた。この知らせやそれ以後の礼拝や教会活動のお知らせはメールで毎週送られてくるニュースレターとともに、教会のホームページにも掲示された。

イーストサイド教会では以前から礼拝をラジオで放送していたこともあり、次週の 3 月 22 日からは、オンラインによる基本的な日曜礼拝が行われるようになった。通常の日曜礼拝に準じる形で、一部の教会員の参加によって、挨拶、讃美歌、説教等が教会の礼拝堂にて事前に撮影され、それを編集したものが日曜日の通常の礼拝時に音声(ラジオ)と YouTube に動画配信されるようになった。その様子は後日視聴することもできる。また通常は教会の後で行われているカジュアルな談話の時間とその後の大人及び子供たちのための聖書勉強会、そして週一回別の日に教会スタッフが中心になって行われている祈りの会は Zoom を使ってオンラインで行われるようになった。

その後徐々に工夫が加えられ、様々な活動が行われた。9 月には天気の良い日曜日に野外での礼拝が行われた。比較的広い敷地があるため、人と人との

間隔を十分に取ることができたため実施が可能であった。教会総会、アドベント、クリスマスといった主な行事はオンラインで行われた。また通常は月1回行われる聖餐式は、2021年1月にオンライン形式で各自が家庭でパンやブドウジュースといった品物を用意して参加する形で再開された。

アメリカでは2020年秋ごろから新型コロナウイルス感染症対策のワクチン接種が本格的に始まり、2021年の春には希望したほとんどの成人の接種が終わった。この状況を受けてイーストサイド教会では4月4日の復活祭が野外礼拝の形で祝われた。そしてこの日初めて、マスク着用の上で対面の聖餐式がおこなわれた。以後、徐々に対面での教会礼拝が再開された。5月18日には教会の役員とその家族に参加者を限定した形で、室内での対面礼拝の試行が行われた。はじめの頃は参加事前申し込み制度がとられたが、その後アメリカでの新型コロナウイルス感染症の状況が落ち着いてきたため、7月からは事前申し込み制度なしの室内対面礼拝が行われるようになった。(ただしその後、デルタ株などによる新型コロナウイルス感染者増加のために、8月22日には再び入場できる人数制限がおこなわれるようになった。)

それ以後、対面での礼拝は継続されている。礼拝の際に全員マスクを着用すること、各家族及びそのほかの参加者のグループ間の席の間隔をあけることなどがお願いとしてニュースレターなどで周知されている。教会員がそれらを守って礼拝に参加している様子はライブストリームの映像から確認することができる。

ここでは2020年3月22日から2021年8月15日までの日曜礼拝の様子をもとにイーストサイド教会の対応を分析する。現在も新型コロナウイルス感染症は引き続き発生しており、今後いろいろな変化がおこることが予想され、その後の様子については今後継続して考察を続ける予定である。この論文では主に日曜礼拝とそれに付随する教会行事(たとえば礼拝後のオンラインでの談話会)の様子を例として取り上げる。これらはイーストサイド教会の数ある活動の一部分にすぎないが、教会の信徒としてのビジョンや歩みについての捉え方が語られる重要な場である。それらからは特に3つのテーマ、すなわち安全性と責任、不安や深い悲しみへの向き合い、振り返りと再評価に関する議論が浮かびあがってきた。これら3テーマに分け、流動的な状況下でのイーストサイド教会の対応とその進む方向性の模索を分析する。

2. 安全と責任

常に移り変わる新型コロナウイルス感染症の状況に合わせて、毎週の礼拝などの教会活動をどのように行っていくのかは、2020年3月当初から継続的に協議されてきた事項の一つである。安全な礼拝やその他の宗教活動の環境を作ることは、教会員の健康上の懸念に答えるという点でも重要である。一方で礼拝やその他の教会活動を行うことは、献金などの経済的な支援の確保とともに宗教的涵養のためにも大切なことでもある。新型コロナウイルス感染症のパンデミックの中では、この点のバランスをとりながらどのように対応し、そしてどれくらいの期間対応を継続するべきかが明確にわからず、手探りで最良策を探る状態が続いた。

安全性をめぐる話はしばしば教会の礼拝などで登場した。教会員の健康を守る礼拝形式の工夫の説明に加え、先行きが不透明なパンデミックの中で、どのように感染を防止しつつ、宗教的な活動や信者のサポートを提供するのかという検討が礼拝などで垣間見られた。そしてその対応からは、彼らの宗教的な方向性と模索の様子がうかがえた。

イーストサイド教会では、新型コロナウイルス感染症の教会としての対応やその理由の説明は、教会員やほかの礼拝参加者に広く分かる形で早くから行われた。国家緊急事態宣言が出されて間もない2020年3月や4月の礼拝の中では、教会として感染を防ぐための安全策を取っていることが細かに説明された。ビデオ礼拝の作成のために教会に実際に集まって司会や説教、歌を歌っている参加者たちは、間隔を十分に取っていること、ドアを開け、不必要な接触を削減していること、通常は開かれている教会施設を施錠していることなどである。このようなアナウンスを通して、イーストサイド教会では目に見えないウイルス感染に対する不安や懸念の対応していることを画面上で見ている教会員に説明した。

このようなアナウンスは単に教会が安全なスペースであることの訴えにとどまらない。イーストサイド教会は、周囲の人の安全を守ることが、信者として、そして広いコミュニティーの一員として、責任ある対応として重要であるとして位置づけられ説明された。またその対応がもつ宗教的な重要性についても触れられていた。教会の司会者や牧師は繰り返して、不安な状態の中で物理的に教会に集まり、礼拝をしたいと思う気持ちやそれができないフラストレーションに言及し一定の理解を示しつつも、今集まるのは賢明ではないと語りかけていた。

2020年3月22日の礼拝では、牧師のデービッド

はイエスが盲目の人に対して話を聞き、癒しなどを行った聖書の箇所を取り上げた。デービッドはその話と関連させながら慈悲の心や行動が今こそ必要とされていると語り、外出を控え、家にとどまるように訴えかけている。

翌週の 29 日の説教ではラザロの死と生き返りの話（ヨハネ 11：1—41）が取り上げられた。デービッドは、イエスは死と向き合いながら大きな視点からの生を考え、神中心の世の中の実現のために歩み、やがて自分の死をむかえていると説明した。そして今家に引きこもっていることは、決して自己中心的な対応ではない。むしろ、神を中心として、イエスのように価値あるものに対して犠牲を払うことであると続けた。パンデミックの中、教会がドアを閉じるという考えは、広く伝道するというイエスの教えに背くことのように見えるかもしれないが、そうではない。外出を避けることでほかの人々がウイルスに感染することを防ぐことは、コミュニティの人々の健康を守るためであって、人々の生活を気遣うイエスの教えや行動につながるものであると訴えかけた。

このようなイーストサイド教会の説教の背景としては、当時のほかのキリスト教会、特に保守的な教会の反応がある。当時のアメリカでは外出が規制されることに対する反発も強かった。加えて、いつもは広く門戸を開いているキリスト教会が通常の礼拝を行わないのは、自分の身を守ることを優先し、聖書を学び、福音を広める点でよくないとし、通常の集会を続ける教会もあった。この動きはメノナイト教会の中でも見られた。メノナイトの教派ではもともと信徒の共同体としてのつながりを強調してきたため、一部の人には継続的に対面での礼拝をするべきだという強い意見があった。デービッドの発言にみられるイーストサイド教会の反応はそれらと異なる立場の明確な表明ともいえる。このように安全に対する語りは、どのような対応が聖書の教えを反映させたものとして適切なのかについての教会の考え方のあらわれといえる。

またイーストサイド教会は、安易に楽観的な観測を語ることもしていない。事態の重大さを真摯に受け止め、事態が悪化し、当時の形式でのオンライン礼拝もできないことがあるかもしれないことは 2020 年 3 月や 4 月に幾度も話された。安易な楽観的な見通しは、たとえ励ましであっても見かけることはなく、むしろ現実の状況を受け止めることに注意が払われていた。

このことはイーストサイド教会によってパンデミ

ックの対応の必要性が一時的なものではなく、ある程度の継続的なものとして考えられていることとも関連する。多くの人にとって、新型コロナウイルス感染症は緊急事態であり、予期しなかった事態であった。それはイーストサイド教会でも同じであったが、比較的早い段階で、パンデミックの期間、またその後の教会運営についての話し合いが行われていた。そのことは教会後の談話の時間や教会総会でのコメントからほかの教会員たちの知るところとなった。たとえばある 11 月の日曜礼拝後の談話の時間に牧師のデービッドは、今月から礼拝時に前で讃美歌を歌っているシンガーの人たちのマスク着用がはじまったことについて、教会員から問い合わせがあったことを述べた。そしてこの変更は教会のシンガーに感染者が出たわけでもなく、今後感染状態が安定し、対面形式の礼拝が再開された時に備えたもので、その際どのように安全な状況で礼拝ができるのかを探るためだとの説明があった。

アメリカでは新型コロナウイルスワクチンの接種が比較的早く進み、2021 年はじめごろから徐々に感染状況がよくなり、対策のための規制の緩和がなされた。その際であっても、イーストサイド教会は対面での日曜礼拝への移行については慎重で、アメリカ疾病予防管理センターや州の勧告を常にチェックしながらの段階的な教会活動の開始、彼らが言う“Soft opening”をしていくとの説明が繰り返しなされた。具体的には前述したように、最初は教会の役員だけの招待者による対面礼拝、次の段階では参加人数制限をしたうえで事前の申し込み者のみ参加する礼拝、そして人数制限なしの事前申し込み者のみ参加する礼拝と続き、2021 年 7 月になって初めて、人数制限や事前申し込みなしの対面礼拝へと移行した。とはいえ、教会内でのマスクの着用と、世帯間においての席の間隔の維持、礼拝後の速やかな退席が求められた。

もちろん、こういった対応はイーストサイド教会のみで行われたものではなく、メノナイトを含む他のキリスト教のリベラルな教会でも同じようなプロセスがみられた。しかし同じメノナイト教会でも保守派の教会は 2020 年の春の一時期を除き、対面での礼拝を行ったところも多い。また教会によってはマスクの着用が求められていないところもある。他の教会の様子はオンラインでの談話の時間ではたびたび登場したことから、イーストサイド教会のスタッフも教会員もそういった周囲の状況はよく知っていたと考えられる。教会の中で、一緒に歌い、説教を聞きたいとの思いを持っている人は多くいただろう。

そういった中でいつ、どのような形で対面礼拝を再開するかは、教会としての立ち位置を考える一つの機会であったといえる。

安全な礼拝への配慮を重視したイーストサイド教会ではあるが、一方では教会員とのつながりも重視し、様々な工夫をしてきている。前述したように、礼拝後には Zoom 等での談話の時間や聖書勉強会がリモートで行われた。加えて天候に恵まれた 2020 年 9 月から秋に数回、外での礼拝を実施した。ワクチン接種者が増えた 2021 年 4 月にはパンデミック後初めて野外で対面での聖餐式を行った。その際には、司会進行と聖餐式の手続きが牧師のメアリーやデービッドから、パンとぶどうジュースの配布者はワクチン接種済みであることの説明があり、感染防止対策をとって式が執り行われていることを伝えた。

対面での礼拝開始後もこれらの配慮は続く。幼い子供を含め、ワクチン接種をできない人や接種者でも対面での礼拝に安心して参加できない人がある。そういった人に対して礼拝のインターネットでの配信は継続して行われている。また教会の行事（アウトドアでのピクニックやイベントなど）では、安心して参加できるレベルでの参加が促されている。

もっともどの程度、どういった形で今後オンラインでの対応を継続していくかは今後の課題の一つである。正確な人数は不明であるが、オンライン礼拝になってから参加するようになった人は一定数いる。2020 年夏には、そういったオンライン礼拝となった後にイーストサイド教会の礼拝に参加するようになった人と教会スタッフとのミーティングが数回行われた。私が参加した会だけでも 6 人ほどの参加者がいた。加えてもともとイーストサイド教会員であったが、転居して教会から離れた人の参加もある。退職し他州へ転居した夫婦が、オンライン礼拝を見ているとの話しや、転居途中で、普段なかなか教会には足を運ぶことができている人が Zoom での談話会に継続的に参加している姿が見受けられた。こういった形で、普段ではイーストサイド教会に関わることがなかった人々の参加がオンライン形式となったことで可能となった。

一方、懸念もある。牧師のデービッドは談話の時間や教会総会でコロナ後の展望を聞かれ、教会の活動がオンライン化してしまうと、消費者マインドが強くなってしまいがちであると語っていた。教会員の間でも健康状態や遠隔地に在住のためのオンライン形式の参加を希望する人がいる一方、いろいろと忙しい週末のスケジュールの中、服装や時間に気にしながら教会に出席するよりも、家の中で比較的自

由な状態で説教を聞きたいと語る人もいた。

アメリカで点在するメガ・チャーチやテレビ・インターネット上の教会の一部では、参加者に様々なサービスを提供することを主眼として活動している教会も多い。そのような教会がある中、サービスのみを気にかけていたのでは、イーストサイド教会としてのミッションはどうなるのか、といったことが教会の牧師や一部の教会員の懸念事項でもあるのだろう。一方、感染症対策を継続し、安全な教会を目指し配慮や工夫をすることは重要であり、それはパンデミックがなければイーストサイド教会を訪問しなかった人への働きかけにつながり、広い意味での福音を伝えることにもなると考える教会員もいる。パンデミックを経て、オンラインでの礼拝を経験した後のイーストサイド教会にとっては、対面ならではの良さを生かしつつ、どのようにオンラインでのみの参加者に対応していくのか、今後も継続する課題でもある。

3. 不安と悲しみへの対処

イーストサイド教会や教会員にとっては、2020 年から 2021 年は、新型コロナウイルス感染症の拡大と並行して、様々なレベルでのチャレンジに直面した時期でもあった。その一つは、教会員の死である。この期間イーストサイド教会ではいつもよりも多くの教会員が亡くなった。新型コロナウイルス感染症が主たる原因でない場合も多いが、パンデミックの状況が教会員を失うことへの対応をより困難なものとしたといえる。たとえばパンデミックの中、葬儀をどのような形式で行うかは、亡くなった人の家族とともに検討しなければならない課題となった。多くはオンラインにて葬儀の模様を公開することとなったものの、いつ、どのような形式で公開して葬儀を行うのかを決めなければならなかった。また悲しみの中にある家族のケアについても、直接の訪問や食事の提供といったことはできず、通常とは異なる方法が必要であった。教会員の死は避けられないが、度重なる葬儀の知らせと、通常のことのできないことからくる心理的な影響は大きい。さらに教会員の多くは、新型コロナウイルス感染症で体調を崩した友人や知人がおり、不安感が広がっていた状況であった。

加えて牧師も含め多くの教会員は、通常の生活ができないことによって大きなストレスを抱えた日々を送っていた。子供たちは学校に行けず、野外でのチームスポーツもできなかった。彼らを見守る親にとっても、仕事やそのほかの活動に制限があり、不

安定な状況であった。たとえ家族であっても、より多くの時間を家の中で共に過ごすことで、通常とは異なる環境となり、そのことで家族間の関係の変化がもたらされた。共同体としてのつながりを大切にするイーストサイド教会にとって、これらは単に個人や個々の家族の問題にとどまらず、教会員の信仰者としての歩みと信者のコミュニティーの間でのサポートと関連する課題でもあった。

イーストサイド教会はそういった悲しみや不安があることをまず認め、それと直面することの重要性を訴えかけた。2020年5月10日の礼拝は教会のそのような様子がわかる一例である。この日はペテロの手紙1の2章やヨハネ14章が取り上げられ、担当のスタッフや教会員によって、家について語りつつ、信仰を中心に日々を過ごすことについてのテーマで礼拝が行われた。

当日の子供たちのお話の時間は教会員のサラによって進められた。サラはカメラ越しに子供たちに話しかけつつ、その日の語りを始めた。サラは家に関してどんな印象を持っていたのかについて画面越しにいる子供たちに軽い問いかけをした。そして今まで家は自分にとっては安らぎの場であったが、最近は複雑な思いがすると語った。サラはそのように自分自身が感じていることを紹介しながら、画面を通じて見ている子供たちに、不安に思ったり、悲しいと感じたりすることは、普通の感情であると話しかけた。そしてそういった感情も含めて神やほかの人に共有し、祈ることができまますようにという祈りで話を締めくくった。

続く説教においても、家との関係はパンデミックの中では、緊張感のあるものとなっていることが語られた。牧師のデービッドは、場合によっては家が精神的にも身体的にも安全でない状況になっているように感じる人もいるかもしれないと語り、その中でも、愛と慈悲の心や行動を育てるスピリチュアルな神の家のメンバーであることを認識することの大切さを語った。

その後においても、不安や苦しみに向き合うことの重要性は継続的に触れられている。特に2021年2月17日から始まった四旬節ではそのことに礼拝の重点が置かれていた。もともとイーストサイド教会は多くのキリスト教会と同様に四旬節をイエスの受難に思いを巡らせ、罪の悔い改めをする期間として位置づけていた。しかし2021年は新型コロナウイルスの影響で通常の儀式が出来ず、その対応が必要となった。たとえば四旬節の始まりを告げる灰の水曜日の教会での礼拝は取りやめとなった。このような

中、イーストサイド教会では、人間の死やそのほか失ったもの、個人のあるいは社会的な不安について立ち止まり、向き合うことがたびたび促された。そうすることによって、教会では、人間の限界を認識し、のちに来る復活祭で思い出されるイエスの復活と教えに向かって進むことができるよう様々な工夫がなされた。

その代表的な工夫は、灰の日曜日の儀式の灰の代替として配布された粗布を使ったものである。教会では小さな粗布に触れ、そのごわごわした手触りや糸のほつれを感じながら、これまでに感じた不安や心の痛みを感じ、避けられない人間の死をみつめること、そしてそのうえで神の恩寵を感じる事が繰り返され促された。まず四旬節の始まりを前に、教会員へのメッセージ映像が作られた。そこではデービッドが教会員に話しかける形式で、パンデミックが始まってからの出来事について触れられた。パンデミックの影響が長期間に及んでいること、それによって教会で集うことや讃美歌を共に歌うことができなくなったこと、病気やそのほかの体調不良や、亡くなった人が多くいること、経済的に不安定な状況となった人びとの存在、人種差別などの社会的な対立による分断の現れ、そして政治的な対立があることなどが手短かに語られた。四旬節はそもそも死や苦しみについて考えるときであるが、この1年は誰にとってもそういったリマインダーが必要ないぐらいつらい体験が身の回りにはたくさんあったと語られた。その後デービッドは、粗布を手にとって、粗い繊維を感じながら、苦しみや嘆きを感じる事、そしてその上で、神を信じ、イエスの復活を望みながら、光を求めていく旅路をしましょうと語った。

四旬節中ではその後も粗布を手にとり、感じた不安や失ったものや人について目を向けることが促された。2月23日の礼拝の最初の歓迎のあいさつで、牧師のジュディーは粗布を片手に、困難な状況に目を向けるよう促した。パンデミックによる個人的な不安や苦しみに加え、社会的にも白人至上主義者の台頭、気候変動、人種差別問題などの課題が多く、圧倒されてしまいそうな状況であることが述べられた。その中で、それらを受け止めること、そして、神を信頼し平和と光を求めて日々を送ることについての祈りの言葉が語られた。

このような悲しみや不安への受け止めの姿勢は、復活祭の日を迎えても継続された。牧師のデービッドは説教で、もう十分つらいことは体験したといった気持ちを持っている人は多いだろうと語り始めた。しかし苦しみが必ずしも復活祭や信仰によって取り

去られるとは限らないと話を続けた。イエスの復活後も弟子たちは様々な苦難がつづき、暴力を受け、時には死に追いやられたことに触れつつ、信仰によって、苦しみから逃れることができるとは限らないと語った。しかし、とデービッドは続け、それらは希望のない苦しみではなく、神がそのような状況下でも共に存在すること、そして変革をもたらし、平和な世界をもたらすことを信じて進む道のりであるとし、一緒に進んでいこうと話を終えた。

このようにイーストサイド教会では、苦しみや不安を感じていることをまず認め、そのうえで直面することが強調されている。そういった苦しみや不安な気持ちは感情的に語られることはなく、むしろ淡々と牧師や教会員によって話されている。しかしそれらは一般論ではなく、具体的な場面の描写とともに述べられることが多く、その場を見ている人にとっても共感しやすい。また率直に語っている様子から、パンデミックやそのほかの不安や苦しみ、困難さの体験を直視し、軽微なものとしては取り扱ってはいないことも伺える。一方で、復活祭での説教にあるように、苦しみや困難が信仰により取り去られるといった安易な約束はしていない。むしろ苦難は続く可能性が高いが、その中で神を信じ、歩みを続けることが語られている。

4. 振り返りと再評価

イーストサイド教会では、このように新型コロナウイルス感染から身を守る安全と、感染拡大をできるだけ防ぐ責任ある行動と、各自が悲しみや不安に向き合うこととがしばしば語られていた。悲しみや不安に向き合う大切さを強調し、不安な気持ちの中、安定や以前の行動様式を望む気持ちには理解を示している一方で、その不安な気持ちの対処として、信仰による苦しみの回避という見解は否定している。そしてその立場は現在のアメリカ社会におけるキリスト教会の動きとも関連がある。そういった苦しみの回避のための信仰ではなく、そういった苦しみを理解した上での信仰の歩みとは何かについて深く考えるように訴えかけている。この傾向はイーストサイド教会の宗教的な立場の捉え方と深く関連している。

キリスト教の中には信仰と現世的な恩恵を結び付ける繁栄の神学 (Prosperity Theology あるいは繁栄の福音、Prosperity Gospel) の立場があり、アメリカにおいても一定の勢力となって存在している (Bielo, 2007)。イーストサイド教会の苦しみの継続の可能性の指摘は、こういった神学的な見解や立場があるこ

とを意識し、それとの立場の違いを表している。イーストサイド教会ではしばしば、不安な気持ちの中、現世的な恩恵を求めることには慎重であるべきであると訴えかけがなされる。それよりもイエスの苦しみや教えを振り返り、経済的、社会的な弱者に対する思いやり、より公正な世の中の実現に力を注ぐことへの呼びかけがなされる。

イーストサイド教会のこのような立場は、2020年から2021年にかけて政治的、社会的な出来事に対する対応にもみられる。新型コロナウイルス感染症の対応と同じようにその際にはフラストレーションや不安感が存在することを意識しつつ、自分たちの振り返りの機会としてとらえている場面が見かけられた。特に2020年は大統領選挙があり、政治的な対立も激しかった。対立は感情的な場合も多く、礼拝後の談話の時間では、たとえ家族であっても、支持する候補者や政党が違えば会話が難しいとの発言がみられた。加えて、白人至上主義者の活発な動き、逆にブラック・ライブズ・マターなど人種差別への取り組みを求める動き、大統領選挙の投票や票集計をめぐる混乱、そしてその後のアメリカ合衆国議会議事堂襲撃事件などが起こり、社会的な分断を感じさせる出来事が次々起こった。イーストサイド教会の礼拝では、その中の対立に言及しながらも、そういった他者を違う立場として切り離すのではなく、視点の違いを理解し、対話に向けての方策を探る呼びかけがなされる場面が多くあった。

アメリカ議事堂襲撃事件が起こった後の2021年1月10日の礼拝がその一例である。司会担当のキャシーは、礼拝の最初の挨拶でほぼ一年前、学生とともにグアテマラでの滞在をパンデミックで切り上げ、混乱の中で帰国したこと、その後もパンデミックによってさまざまな行事や変更を体験したこととともに、水曜日に関した議事堂の襲撃はショッキングでつらいものであったと語った。そして聖書のパウロの言葉にあるようにそんな中でも神のミッションに参加して日々を過ごしていくことができますようにと述べて挨拶をしめくった。その後の説教でもワシントンの事件が取り上げられた。この日はルカ3章1-22節、洗礼者ヨハネが悔い改めを当時のユダヤ人コミュニティに語っている場面が取り上げられた。牧師のデービッドは聖書の話に触れながら、この話でヨハネが悔い改めを呼び掛けているが、それはわたしたちにも投げかけられているものであると話しかけた。議事堂を襲撃した人々やトランプ支持者、そしてQアノンの人たちは、過激な一部の人たちで、自分たちとは違うと思っていないだろうか、

と疑問を提示した。そして、そういった人々を悪者として片づけてしまうのは簡単であるが、自分たちも神の教えを拒んだり、無視したりしていないだろうかと続けた。その上でデービッドは、どういった対応が、個人そしてコミュニティとして信仰者として生きることか、そして謙虚さを失わず、公正な行動をとることとなるのかについて考えてみる必要があるのではないかと語りかけた。デービッドは、今はつらい時で、不安で、おそれを感じるが、だからこそコミュニティとして私たちは教会に集っているのであって、みんなで協力することができる。まず自分たちの罪を悔い改めることから始めましょうという言葉で締めくくられた。

ここにみられるようにイーストサイド教会では、立場や意見が異なる人の存在や動きを認めながらも、そういった違う立場の人を単なる悪としたり、他人事として片づけたりしてしまうことの危険性に注意を喚起している。キャシーのコメントにあったように、これらの出来事や動きは多くの教会員の人にとって心を痛めることである。だからといってそういった人々を非難することだけでは不十分であると、自分たちの態度や行動を振り返り、思いやりや慈悲の表し方を考える機会ととらえることこそ信徒として重要なのではと呼び掛けている。

同じような自己の振り返りと自分たちの視点や行動の再評価へのいざないは別の場面でも見られた。2020年7月24日の礼拝では、デービッドが、神は自分たちの立場の側にあるといった考え方はしばしばキリスト教の歴史に見られると指摘した。彼は続けて神が自分たちの側についているとして自己の立場の正当性を人間は訴えがちであるが、そうではない。信仰とは神のミッションに向かって生きることであって、苦しみが伴う場合もある。神が自分たちの味方であると安易に訴えかけるのではなく神の教えについて考える謙虚な態度が必要となることであると語っている。同じような訴えかけは2021年1月24日の礼拝でもみられた。この日は、ルカ5章1-11節を取り上げながら、イエスに従って生きるとは時として私たちの思いもかけないことを伴うかもしれないし、忍耐強く控えめな態度や、自分自身の変化を含むものかもしれないと語った。そして右派の過激派の人たちだけがイエスの教えを曲解しているのではなく、自分たちもその傾向があると指摘した。このように礼拝ではイエスの教えが今の社会的な状況下でどんなことを意味するのか、深く考える必要があることが訴えかけられている。

このような振り返りと再評価は自分たちの解釈や

行動を過大に評価することへの指摘とも関連する。2020年11月16日の礼拝では、イザヤ書6章のイザヤの召命の場面が取り上げられた。その日の挨拶、こどもの時間、そして説教において、人間は不完全で間違いをおこす存在であること、それでも神は存在し、自分たちと一緒にミッションの実現に向けて歩むよう呼び掛けていることが話された。完璧ではない自分たちを認めること、そしてそれを認識し行動を再評価しながら信仰の歩みを進めることの大切さがここでも語り掛けられている。

不完全な存在としての人間と、そのような人でも神のビジョンの実現のための道具として参加できることの指摘は、キリスト教右派の中にもみられるものである。たとえばアメリカで宗教的右派の政治的関与を取り上げた『ファミリー』(2019年)の作品やそのもととなったシャーレットによる本(Sharlet, 2009)にもしばしばそういった人間観が指摘されている。この点において、宗教的右派と立場の違いは絶対的なものではないともいえる。しかし、方向性の違いは存在する。イーストサイド教会では、それに加えて、社会的、経済的弱者への深い思いやりや、暴力やその他の力の行使による対立の解決ではなく平和的な手段の追求といった点が神の教えの中心として位置づけられて、それに照らして自己の再評価が促されている。

V. おわりに

2020年から2021年にかけての約17か月は、イーストサイド教会にとってさまざまなレベルで大変な期間であった。社会的な分断、経済的格差といった問題はある意味、継続的な課題である。しかし新型コロナウイルス感染症の拡大が加わることによって、以前からあった問題や対立がより一層表面化された上に、それまで行ってきた基本的な教会活動そのものにも影響を与えた。またその影響は予想よりも長期におよび、個人的なレベルにおいて、そして教会といった組織のレベルにおいて深いものであった。対応するにも明確な解決策が見えない状況の中での教会は、モラルティーに関する研究(たとえばMeinert, 2017)の事例にあるように、日常が失われた状況にあったといえる。

この論文で紹介したように、そのような中でのイーストサイド教会の分析からは、教会員としての信仰の歩みの方向性の模索の様子が浮かびあがってくる。新型コロナウイルス感染症というよく理解できていない脅威の中で、どのような行動が安全で、責任のある行動かの判断は常に再評価を必要とする。

その中でイーストサイド教会は、安易な楽観論や解決策に頼らず、現実の厳しい状態を見つめ、イエスの教えをどのように現在の状況下でとらえ、行動すべきかを熟慮することを訴えていた。

そしてそのような模索は常にその周辺にある考え方や視点、出来事との関係の中にあった。新型コロナウイルス感染症については、感染拡大の危険の中、十分な感染対策なく対面の礼拝やその他の集会をするキリスト教会や教会員の存在があった。大統領選挙やその後の混乱では、信仰による恩恵や神による自分たちの立場の支持を訴えるキリスト教右派の動きがあった。このような他者の存在の中でイーストサイド教会は自分たちのあるべき方向性を考え、模索している。

あるべき姿や行動についてモラルティーを考える際、後悔の念や達成できなかったことにその焦点が行きがちである。しかしイーストサイド教会の考察からは、もうすこし広くその周辺の出来事との関連を考察することの必要性がうかがえる。キリスト教右派による政治行動や感染防止対策が不十分な中での礼拝を行うキリスト教会は、一見するとイーストサイド教会とは相容れない立場の違う他者である。しかし自己の振り返りと再評価を促すイーストサイド教会の様子からは、そういった相容れない立場との関係性を考慮することによって自分たちの立場を捉えなおそうとしている。そしてそこから、他者や周辺の出来事との関係をどのようにとらえているかの考察が、モラルティーの研究や分析のヒントを与えてくれる可能性がうかがえる。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 20K01218 の助成を受けたものです。研究に協力いただいた教会スタッフや教会員の方に深く感謝申し上げます。

文献

英語文献

- Bielo, J.S. (2007). 'The mind of Christ': Financial success, Born-again personhood, and the anthropology of christianity. *Ethnos*, 72:316-338
- Dyring, R., Mattingly, C. & Louw, M. (2017). The question of 'moral engines': Introducing a philosophical anthropological dialogue. In C. Mattingly, R. Dyring, M. Louw, & T.S. Wentzer (Eds), *Moral engines: Exploring the ethical drives in human life* (pp. 9-38). Berghahn.
- Keane, W. (2016). *Ethical life: Living a moral life amidst*

- uncertainty and danger*. Oxford University Press.
- Kleinman, A. (2007). *What really matters: Living a moral life amidst uncertainty and danger*. Oxford University Press.
- Laidlaw, J. (2002). For an anthropology of ethics and freedom. *Journal of Royal Anthropological Institute*, 8(2), 311-332.
- Laidlaw, J. (2017). Fault lines in the anthropology of ethics. In C. Mattingly, R. Dyring, M. Louw, & T.S. Wentzer (Eds), *Moral engines: Exploring the ethical drives in human life* (pp.174-196). Berghahn.
- Lambek, M. (2017). On the immanence of ethics. In C. Mattingly, R. Dyring, M. Louw, & T.S. Wentzer (Eds), *Moral engines: Exploring the ethical drives in human life* (pp.137-154). Berghahn.
- Naka, T. (2011). The spirit of giving: Mennonite narratives about charitable contributions. *Culture and Religion*, 12 (3), 317-338.
- Mattingly, C. (2014). *Moral laboratories: Family peril and the struggle for a good life*. University of California Press.
- Mattingly, M., R. Dyring, M. Louw, & T.S. Wentzer (Eds), *Moral engines: Exploring the ethical drives in human life*. Berghahn. In C. Mattingly, R. Dyring, M. Louw, & T.S. Wentzer (Eds), *Moral engines: Exploring the ethical drives in human life* (pp.61-82). Berghahn.
- Meinert, L. (2017). Every day: Forgiving after war in northern Uganda. In C. Mattingly, R. Dyring, M. Louw, & T.S. Wentzer (Eds), *Moral engines: Exploring the ethical drives in human life* (pp.100-115). Berghahn.
- Raffoul, F. (2017). The history of responsibility. In C. Mattingly, R. Dyring, M. Louw, & T.S. Wentzer (Eds), *Moral Engines: Exploring the ethical drives in human life* (pp.230-250). Berghahn.
- Redekop, C.W. (1989). *Mennonite society*. Johns Hopkins University Press.
- Robbins, J. (2004). Between reproduction and freedom: Morality, value, and radical cultural change. *Ethnos*, 72:293-314.
- Sharlet, J. (2009). *The Family: The secret fundamentalism at the heart of American power*. Harper Perennial.
- Throop, C.J. (2017). Being otherwise: On regret, morality and mood. In C. Mattingly, R. Dyring, M. Louw, & T.S. Wentzer (Eds), *Moral engines: Exploring the ethical drives in human life* (pp.61-82). Berghahn.
- Wentzer, T.S. (2017). Human, the responding being: Considerations towards a philosophical anthropology of responsiveness. In C. Mattingly, R. Dyring, M. Louw, & T.S. Wentzer (Eds), *Moral engines: Exploring the ethical drives in human life* (pp.211-229). Berghahn.

日本語文献

神原ゆうこ（2015）「公的領域におけるモラルティエを文化人類学的に考察するための試論として」『コンタクト・ゾーン』8:2-14